

◎特選

校庭の紅梅と「武士の娘」

—私の中学校創立五十周年記念誌—

新潟大学教育学部附属長岡中学校三年

金山 恭子

私たちの中学校は来年創立五十周年を迎えます。他の学校の友だちの話によると、市内の古くからあるほとんどの中学校も来年は創立五十周年なのだそうです。

ところで私たちの学校は新潟県長岡市で唯一、幼稚園と小学校・中学校が同じ敷地内にあります。そして校舎と敷地を、幼稚園児、小中学生みんなで共有している学校です。それぞれの創立の年は違うのですが、私たちはこの三つを合わせて附属長岡校園と呼んで親しんでいます。

さてその附属長岡校園の校門のそばに、何やらいわくありそうな二本の紅梅の古木があります。その梅の木は、毎年春になると、それはもう見事な花を咲かせます。

今年の春もまた、その梅の花はまるで当然のように、紅い花と香りを、空いっぱい誇らしげに広げました。

この二本の梅の木は、高さが私の身長のご二倍近くあります。幹は私一人が手を広げた長さでは全然足りず、二人で手をつないでやっとひとまわりするくらい太さです。二本の梅の木は、昔からの厳しい冬の雪の重みや強い風などによって、幹に痛々しい傷跡や大きな穴を残しています。またこの二本の木のうちの一本の幹が地面になめにつきささったようになっていました。このように決して美しい幹とは言えないのですが、スポーツ選手の筋肉のように幾重にも筋が重なり、それが幹の中央でこぶとなり、木肌はまるで木炭のように黒く光って威厳を感じさせています。そして、その幹からすらっとした枝が八方に広がり、春にはそこにうす紅色のかれんな梅の花がたわわに咲くのです。幹の太さと枝のコントラストが独特の雰囲気をも出し、さらにこの幹の重圧があるために、花の鮮やかさがひととき目立つものとなっています。

この紅梅の木が植えられてから、すでに百年以上たっていると思われます。しかしこの木を見ていると、体内には昔から変わらぬ、いえそれ以上の、はかりしれないエネルギーが秘められているような不思議な気になります。

その紅梅を普段から見ていると、校園の幼稚園児がその木に登ろうとしたり、時には木と格闘

したりしています。幼稚園の先生はその木が美しい花を咲かせる古木であるせいか、園児を注意します。園児はというと、そんなことおかないなく、木によじ登ったり、棒か何かでチャンバラをして切りつける真似をしたりしています。幼稚園の先生は例え真似ごとでも、その木が傷つけられたら大変と思うのでしょうか。その木が切られる前に、先生が率先して園児に切られていきます。そして木に登った園児に降りて来るように頼んでいます。

私は時々、中学校の先生に、「幼稚園の先生、大変そうだよ。助けてあげたら。」と言うのですが、中学校の先生は、「どうも言葉が通じなくて……。」と言いながら逃げて行きます。

こんな日々を過ごしているこの紅梅の木のことを、私をはじめ知ったのは三年ほど前、この中学校に入学する直前のことでした。

きっかけは一個の和菓子でした。

その和菓子は梅の形を型どった可愛らしいもので、「武士の娘」と名づけられていました。このお菓子にはしおりが添えられており、私はそのしおりを読んで、このお菓子のモデルが附属長岡校園にある紅梅であることを知りました。そして、それが武士の娘「杉本鋏子」という人物との出会いでもあったのです。しおりによると、この紅梅は百年も前に、幕末の戊辰戦争で官軍と

戦って敗れた長岡藩の当時の家老、稲垣平助が植えたものだと言うのです。

稲垣平助は長岡藩の家老でありながら長岡藩が戊辰戦争に参加した際に、ひとり戦争に参加しなかった人で、戊辰戦争後に地元の一部の人からたいそう非難されたそうです。杉本鋏子はその稲垣平助の娘で、アメリカで美術商を営んでいた人と結婚して、杉本の姓になり、渡米したのだそうです。

さらにしおりによれば、鋏子はその後アメリカで、「武士の娘」(A D A U G H T E R O F T H E S A M U R A I) という本を書いて発表し、当時のアメリカで大ベストセラーになったとありました。和菓子の名前はこの本からとったものなんでしょう。

このお菓子は、私が中学校へ入学する前に、父が買ってきてくれたものです。その頃、私はこの学校へ入学の手続きをとったばかりでした。小学校で親しんだ友人と離れて、今の学校に入学することになった私は期待と、それと同じくらいの不安な日々を過ごしていました。そんな私に父は、今度通う附属長岡校園に、植えられているという紅梅とゆかりのある和菓子を買ってきてくれたのです。少し興味を持った私は、父に連れられてその紅梅を入学前に行ったものでした。桜より濃いめのピンクの花が満開でした。そしてその下では、白いジャケットを着た白髪のおじいさんがスケッチをしていたことが印象に残っています。これで、「こんなにも穏やかな雰

囲気のある校舎だもの、何とかやっていけるよ。お父さん。きつと……。」と思ったものでした。

あれから三年。私はその杉本鉞子という名前を頭のすみにおしやっていました。

ところが、最近私たちの学校が創立五十周年を迎え、それを記念する行事も予定されていると、先生にお聞きしました。私はその時はただ何気なく、きつとその行事では、誰か偉い人がお祝いの言葉を言ったり、記念誌が発行されたりするんだらうなと思いました。けれども私は来年の春には卒業です。私が卒業する春までにはそんな記念式典はないだらうなとも思っていました。

そんな時です。私は「杉本鉞子」という名を再び目にしました。それは国語の時間に方言についてのレポートをまとめる時でした。市立図書館で郷土の方言資料を探していた私は、普段あまり読むことのない郷土資料の書棚をのぞきました。その時、私の目にとびこんできたのが「武士の娘」というタイトルの一冊の本でした。私はなんだか懐かしい思い出に出会ったような気持ちになりました。

私はその時、この学校に入る前から見ていた思い出深いあの紅梅、あの古い歴史を持っているような紅梅と、杉本鉞子がとても因縁のある人だったなあと思いかえました。そしてこの本を読

んだら、何かあの紅梅についてわかるかもしれないと考えました。またその自分にとって思い出深い紅梅を調べること、私は私なりに、学校の創立五十周年記念のお祝いができたらいいなとも考えたのでした。

しかし、実際にこの本を読んでみるとなかなか読みすすめることができませんでした。意味がよくわからない言葉が多かったということもありますが、それ以上に今と異なる生活の様子が書かれているために頭にイメージしながら読んでいくことが難しかったです。それでも、何回か読んでいるうちにだんだんと理解できるようになりました。

特に、

「西洋は西洋、東洋は東洋。ここにいる間は伝統的な美の標準など忘れることにしましょう。自然のままの美しさが、この大きな自由な、くつろいだ部屋にいちばんびったりしているんですから。」

という文章に鉞子の自然で自由な心が伝わってくるような気がしました。

鉞子はまた「武士の娘」の中で、名誉を大切にすることを武士の精神を伝えるだけでなく、自らが生まれる数年前に長岡でも被害の大きかった、幕末の戊辰戦争で自分の父、母、姉や兄、そして多くの人々の運命が変わり、苦しんだことを書きしるし、世界中に平和を訴えています。それだけ

に、太平洋戦争前に自分の愛する二つの国が敵対しあうようになった時、彼女はどれだけ心を痛めたことでしょう。

アメリカで鉞子は「武士の娘」を発表してとても有名になりました。鉞子はこの本を、日本とアメリカを結ぶ架け橋にしようとしたのでしょう。鉞子の願いを込めたこの本は、鉞子個人とアメリカの読者を結びつけました。しかし、今だったら日米の架け橋になれたのに、太平洋戦争を迎えようとしていた当時では、日本とアメリカの架け橋になることはできませんでした。

そして現在、あふれる砂のようなたくさんの本の中に「武士の娘」は埋もれてしまい、人々の目にふれることも少なくなりました。彼女の出生地である長岡でさえ、彼女を知る人はそう多くはないでしょう。

長岡市の歴史をまとめた長岡市史の前書きにはこうして書いています。

『長岡市史に登場した人間像を振り返ってみると、その一人一人に限りない親しみを覚える。そればかりか、市史に姿さえあらわすこともできずに、ひたすら陰にひそんで、長い長岡のあゆみを支えてきた、無数の無名の人々のつながりにも、あわれ深い縁を感じざるをえない。市史を手にして思うことは、ここに長岡の過去と現在と未来とを結ぶゆたかな絆が生まれたという、しみじみとした感動である。』

長岡でさえ知る人が少なくなった鉞子の存在、すなわち「武士の娘」という作品の存在は、戦争という暗やみを通してなお今日でも、私たちにとってきつと輝きを失うことなく、未来に続いていくものだと信じたいと思います。そうであればなおのこと、私は私ができることとして、この鉞子と、私たちの学校の紅梅のかかわりについて、自分で調べて残しておきたいというふうに願うようになりました。

残念ながら、この「武士の娘」では杉本鉞子について多少知ることができたのですが、かんじんの私たちの校園の紅梅の木については何もわかりませんでした。

私はなんとかして、郷土資料の中から手がかりを求めようと市立図書館に通いました。しかし、いっこうにそのような資料は出てきません。

ところが、その市立図書館で私は長岡市の広報誌を目にしました。そしてそこで一つの記事を見つけたのです。それは鉞子についての講演会が、その図書館の別室で開かれるというものでした。私は日曜日の午後、講演会場に出かけました。

講演の内容は、鉞子の少女時代を中心に、「武士の娘」に書かれなかった出来事についてのお話でした。

私は鉞子と紅梅の関係について質問しようと思ったのですが、見ず知らずの大人の中で、これは大変に勇気があることでした。それでも思い切って私は手をあげました。「なぜ鉞子の実家である稲垣家がこわされてもう何十年にもなるのに、紅梅だけが私たちの学校に残っているのですか。」という私の疑問に、講師の方は、

「ううん。はっきりとしたことはよくわかりませんね。詳しいことをご存じの方がいれば、私もお聞きしたいくらいです。」

と答えられました。講演会終了後、期待していたような答えがもらえずに残念に思っ、うつむいていた私の肩を、とんとんとたたく人がいました。振り返るとそこには優しそうなおじいさんが立っていました。

「さっきあなたが質問したことについて、私が知っていることを教えてあげるよ。」

と笑顔で私に話しかけてくれました。おじいさんの話してくれたことをまとめるとだいたい次のようなことでした。

稲垣邸がなくなった後、その跡地には長岡女子師範学校が建てられたが、稲垣家で女中をしていた「お松さん」という女性が、梅の木だけは残して欲しいと望み、その後も自分で育てたらしいこと。梅が学問の神様と言われている菅原道真とゆかりのある木であったことから、その後も

心ある人たちが、この紅梅を残そうと努力し続け、戦後、女子師範学校が新潟大学教育学部となって移転した時、梅の木も一緒に新しい移転先へ移し変えたのではないかといいこと。そうしてまた新潟大学が新潟市へ移転することにもなって、その跡地に引っ越してきた私たちの学校の敷地の中で、そのまま落ちついたのではないか。そのようなことを、おじいさんはいていねいに教えてくれました。ただ、それは確証のない言い伝えのようなものであると私は感じました。

しかしました。このおじいさんの話を聞いて、これまで私は書いてある書物からだけ、色々調べようとしてきたけれど、鉞子と紅梅について知っている人に、もっと自分から聞きに行けばよかったんだと気づきました。私は鉞子のことなんか長岡ではもう誰も知らないだろうと、たかきくくっていました。なぜなら学校の先生方でさえ誰も知らなかったのですから。学校の外でも、もっといろんなことを知っている人を、ただ待っているだけではなくて、自分から探せばよいのです。そこで私はそういう人を自分から訪ねる決心をしました。

私はまず最初に、そうだ、和菓子屋さんがあったじゃないかと思いました。あの父が買ってきた「武士の娘」という和菓子をつくったご主人に聞けばいいんだ。お菓子についていたしおりの内容以外にも何か知っていることがあるかもしれないのです。

私はさつそくその和菓子屋さんに電話をしました。そして、そのお菓子のことについて直接お会いしてお聞きしたいとお願いました。和菓子屋さんのご主人はお忙しい方なのに、いつでもどうぞと快く引き受けていただきました。

「こめひゃっぴょうほん^ほ」というその和菓子屋さんのご主人は樋口さんという方です。樋口さんご夫妻の歓迎を受けて、私は、どうして「武士の娘」というお菓子をつくらうとしたのかということをお聞きしました。

すると樋口さんは、「佐々木佳子^{よしこ}」さんという長岡郷土資料館にお勤めの方に、「長岡出身で国際交流に努めた女性の方を題材にして、お菓子をつくって欲しい。」と依頼されたので、つくってみようと思ったのですよ、と説明してくれました。

そして樋口さんは、

「私はいつも、長岡の歴史や、長岡の心を伝えたくてお菓子をつくっています。あの梅の木の由来が本当に事実かどうか私には分かりません。けれど私もあなたと同じ中学校を卒業しているのです。私の母校の敷地の中にある梅の木が、杉本鉞子の生まれ育った家に、あったものだというお話を佐々木さんからお聞きして、はっきりしたことは分からないけれど、それが本当の話だと信じたくなったのです。」

とおっしゃいました。

樋口さんは雪国長岡の「雪」をイメージした白を基本にして、その中心に清らかで、しかもきりりと咲いている紅梅のイメージを引き立たせようと、紅を入れたお菓子を創作したのだそうです。そのお菓子を包んでいる紙の色も、鉞子が生前愛した萌黄色^{もえぎ}にしたのだそうです。

「鉞子さんは、日本人だという誇りを持っていた人。いつも控えめだが、その心の内では自己主張をきちんとできる人。私は長岡の誇りだと思っています。できればあの校園の梅の木の下にその逸話を紹介する案内板のようなものも欲しいのですけれど……。」

樋口さんは別れ際にそのように、私に話をしてくれました。そして、詳しいことは郷土資料館の佐々木佳子先生を訪ねてみたらいいですよとすすめていただきました。

そこで、私は資料館の佐々木佳子先生の所にうかがうことにしました。

佐々木佳子先生は、長岡で女性グループの中心となって杉本鉞子を研究する「武士の娘研究会」を主催なさっている方です。

先生はまず最初に、なぜ杉本鉞子を研究しようとしたのかということを熱っぽく語られました。

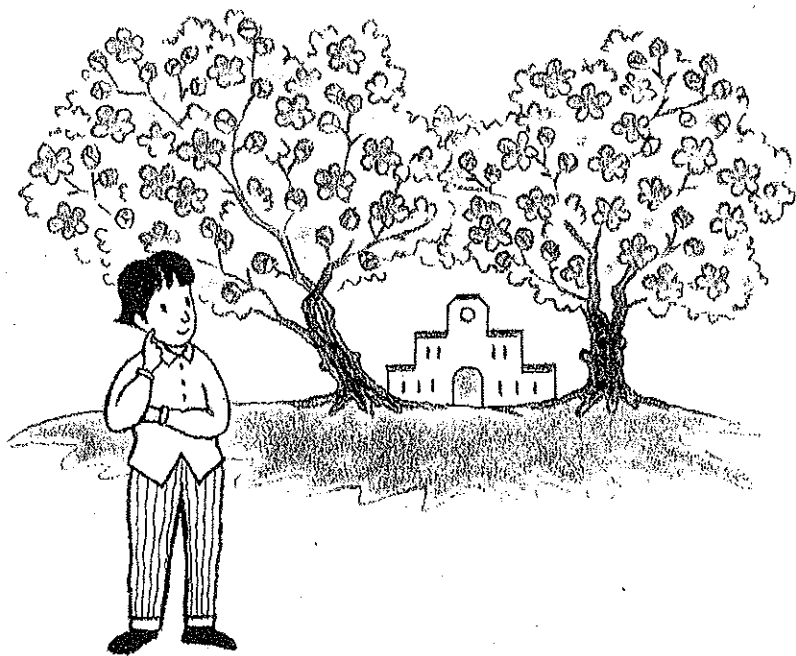
「長岡には「米百俵」（山本有三の劇）の小林虎三郎と、「武士の娘」の杉本鉞子がいいます。この二人から学ぶこと、この二人を研究することは長岡の人間にとって大切なことだと思わす。」

先生は私に一生懸命語られました。

先生は地元の女性として、女性の視点から生活や文化が描かれている「武士の娘」を読み深めることは有意義なことだとおっしゃいました。また、国際化が叫ばれている今こそ、生活や文化の面から、異文化の自分を語ろうとした杉本鉞子の心に学ぶべきことは多いと語られました。過去の人から学ぶことで、長岡の未来がきっと見えてくるに違いないと信じておられるのだそうです。そこで、もっともっと鉞子のことをみんなに知ってもらおうと、和菓子屋を営んでいらっしゃる樋口さんに、鉞子に縁のあるお菓子を一つつくってもらったのだそうです。

先生は、戦後ずっと神戸に任んでいらした、鉞子のお孫さんとも交流があり、鉞子に係する新聞や文献をたくさん収集なさっていて、その一部を見せてくださいました。

そこでとうとう、私の疑問に答えてくれる新聞記事を発見したのです。それは昭和四年五月二十一日付けの地元の新聞でした。杉本鉞子について語っているその記事の一部に、こうするされていきました。難しい漢字や言い回しがあって読みとるのに苦労しましたが、そこにはだいたいの次



のようなが書いてあったのです。

『長岡の最近の発展の話になると、鉞子は長岡の変化はまれなことであると述べた。また、そこにはなかなか美風も認められるという。その一例として、現在女子師範学校しはんで、学校の用務員の仕事をしている「お松」という一老女がいる。三十余年勤続したので、最近表彰された。お松は元は稲垣家の女中であった。女子師範学校の敷地が稲垣家の邸跡で、そこには父、平助が最も愛した梅の木があった。お松が自ら志願して女子師範学校の用務員の仕事についたのも、この梅の木のためであったと言う。ふびんな者ですと、梅の木を思っか、唇を結んでかろうじて涙をおさえるのみであった。』

私はなんだか、今までの胸のつかえがすつとおりるような気がしました。あの私の肩をたたいてくれたおじいさんのお話は本当だったのです。

しかし佐々木先生はその時、「ただこの新聞記事とは別に、その梅は梅うめざえもん左衛門」という人が植えた梅であったという説もあるのですが……。」とおっしゃいました。そして、「本当は誰の梅でもいいのです。どちらを信じるかはあなた次第です。ただ、梅の由来を大切に残そうとし、さ

らに梅の木を守り育てようとしてきた郷土の人の思いは大切だと思いませんか。」とおっしゃいました。

先生はたくさんの鉞子に関する資料を私にくださいました。その上、小さな本の形をした陶器製の置き物もプレゼントしてくださいました。そこには鉞子の顔写真と「武士の娘」の表紙がはられています。先生はこれを、ご自分で企画して、陶芸家の方につくっていただいたのだそうです。

私はなんだか先生の心をいただいた気持ちにして本当にうれしく感じました。

さて、私たちの学校と紅梅の結びつきについては、だいぶはっきり見えてきたような気がしました。

ここで私は、それではこの紅梅と関わってきた人はどのような方だろうと思いました。

それにはまず、私たちの学校が来る以前に建てられていた新潟大学の、さらにその前身の一部だった女子師範学校の卒業生や、新潟大学の先生にお聞きしたらどうだろうと思いました。私は詳しく知っていそうな近所のおばあさん方に相談しました。

すると長らく新潟大学に勤められ、女子師範のことについても詳しい先生がいるということ

お聞きしました。

そこでその先生にお話をうかがうことにしました。その先生のお話によると、その梅の木は、女子師範学校の正門の玄関にあって、写真なども残っているとのことでした。

そして女子師範学校が戦後新制の新潟大学として移転することになった時も、学校にとって大切なシンボルであるからとして、その梅の木も一緒に移されたのだそうです。その先生は、師範学校時代の梅のことを知っていらっしやる卒業生の方も紹介してくださいました。

その卒業生の方の話によると、毎年梅がつけた実を、女子師範学校では梅干しにしたそうです。そして年一回の遠足の日、その梅干しでおにぎりをつくり、それを持って出かけたのだそうです。とてもおいしくて、特に梅干しは他の家のものとはくらべものにならなかつたと言います。遠足の楽しかった思い出は、そのおいしかったおにぎりの中に入っていた、校庭の梅の実からつくった梅干しとともに、今も大切なのだそうです。

私はお話をうかがいながら、そのように愛されていた梅の木のことについて、私たち今の中学生や、先生は誰一人知らず、語り継がなくなっていることに寂しさを感じました。

そこで、女子師範の同窓会の仕事をなさっている方なら、たくさん卒業生が、校庭の梅につ

いてどのような話をしているのか、より多くお聞きできるのではと思いました。私は近所で知っている方をお願いして、市内に住んでいらっしやって、女子師範学校の同窓会でお仕事をなさっている方を紹介していただき、お話をうかがうことができました。

その方は丸山さんと言って、戦中に女子師範学校を卒業された方です。その方のお話によると、梅の木について、詳しい様子はほとんど記憶がないのだそうです。当時は生徒全員が寮に入っていて、寮の通用門しか通らなかつたのだそうです。当時の先生方が利用された正門にあつた梅の木は、当番の仕事とか、よほどのことがない限りそこを通ることはなかつたのだそうです。けれども、その梅の木が鉞子の梅の木だとか、梅左右衛門の梅の木だとかという説があること。梅の木は太平洋戦争での長岡大空襲にも生き残り、そして昔の女子師範学校の校舎から今の場所に移されたこと、は聞いているのだそうです。

そして、同窓会で集まった時は、ただひとつ当時から受け継がれている梅の木をみんなで見に行つて、昔の学校生活の思い出を語り合いながら、この梅の木を大切にしてもらいたいと言いつ合っているのだそうです。私たちの中学校の近くに住んでいる丸山さんは、たびたび他の卒業生からの電話で、梅の木が元気であるかどうかの報告を求められるので、その度に梅の木を見に行つたり、写真におさめたりしているのだそうです。

丸山さんは私に優しくこう語りかけました。

「どのような時代でも、どんなささいな事でもその本当の由来を知っておくことが大切なのです。よね。あなたはそれを知ろうとしている。えらいわね。それなのに本当に学校に植えてあった梅の木のことを詳しく覚えていなくてごめんなさいね。それでもね。今、あの木を見ていると、根っこがしっかりしているでしょう。どんな台風がきてもだいじょうぶ。枝葉は生えてきます。根っこがしっかりしていることが何事も大切だという象徴なのですよね。」

私は丸山さんのお話をお聞きしながら、私のおばあちゃんと話をしていような気がしていました。丸山さんだけではありません。今まで色々な人と「校庭の紅梅」として、また「武士の娘」の著者、杉本鍼子の家の紅梅」としての「梅の木」についてお話をうかがってきて、どこかでみんな私とつながっている、とても親しい方々なのだと思います。

きっとそれは、鍼子の家の紅梅が、女子師範学校から大学、そして今私たちの校園の紅梅として脈々とこれからも生きて欲しいという思いがそうさせているのでしょう。私の思いはどこかの根っこできっと、この方々の思いとつながっているんだと思うのです。

また女子師範学校の卒業生や、杉本鍼子を研究している女性の方々との出会いを通して、その方々を結びつけるには「白い梅」よりも「紅い梅」が最もふさわしいとも思います。ひょっと

したら、そのような女性の思いのつながりが、鍼子の家の梅をこれまで守ってきたのかもかもしれません。

そして私は、これまで色々な方からお聞きした話から、私は私たちの校園の校庭にある紅梅は、鍼子の家にあつた紅梅にまちがいないとよりいっそう思うようになりました。

さて、私はこれまでこのように何人もの方々からのお話をうかがって、自分たちの中学校の創立五十周年のための、「私の記念誌」として、色々わかったことを自分なりにまとめることができるとような気がしています。けれども、それでもまだよくわからないことや、新しく疑問に思ったことも逆に出てきました。

まず一つ目は、なぜどのような理由で梅の木を移したのか本当の理由がまだはつきりしないこと。

二つ目として「お松さん」が守ったという梅の木を、どのような人がその後を守り、またどのような人（職人さん？）が実際に移して植えたのかということ。

三つ目に、鍼子の家の梅であるという説とは別の説について、もう少し詳しく確かめたいという事。

そしてさらに、梅の木ばかりではなく、他にも何か由緒あるものが、学校の敷地の中にあるのではないかということです。

残念ながら、今の段階ではまだそれを知ることができません。また悪いことに、昔のことを知っていて、貴重なお話をしてくださるお年寄りが年々亡くなってしまわれているので、私の疑問は簡単に解決しそうではありません。今回お話を聞こうとしても、体調を崩されてお話しすらできないという方もいらっしゃるのです。それでも私はあきらめずに、色々の話を、色々な人からこれまで以上に聞きたいと思っています。

私が校庭の紅梅について調べていたある日、アメリカのモンデール駐日大使夫人が、長岡市を訪問しました。そして、長岡市に建てられた杉本鉞子の記念碑のそばに、「ハナミズキ」の木を植樹しました。それを伝えるニュースをテレビで見た時、私は「ハナミズキ」なんて木、なんだか杉本鉞子の碑にあわないなと思ったものでした。しかし後で調べてみたら、「ハナミズキ」という木はアメリカでは親しまれている、アメリカを代表する木なのだそうです。そんな「ハナミズキ」の木と、私たちの校園にある、日本を代表するような花「紅梅」が共に親しまれたら、もっと素敵なことだと思います。私はこの「ハナミズキ」についても、そして「校庭の紅梅」についても、知っていることや、その由来を語り継いでいかなければならないと思います。

佐々木佳子先生からいただいた贈り物が、今、私の部屋に飾られています。そこにさりげなく付けられていたしおりには、「MY TREASURE (私の宝)」と書かれています。私は私がかこれまで、色々の方と出会い、色々なことを知ったことこそ、私にとって大切な宝物だと思います。

雪国長岡では春は遅くやってきます。私が来年この中学校を卒業する時、まだあの校庭の紅梅は咲いてはいないでしょう。

でも今の私にとって校庭の紅梅は、もうただの花をきれいに咲かすだけの紅梅ではありません。紅梅が咲いているとかいないとかが問題ではないのです。私たちの校園にある校庭の紅梅は、ただそこにしっかりと立っているだけで、絶えず私に色々な人を思いおこさせてくれます。

「武士の娘」を著した杉本鉞子をはじめとして、お松さん、樋口さん、佐々木先生、丸山さん……。私は梅の木に向かって、そういう人たちに思いを走らせます。そういう人たちの思いを感じとりたいと願うことができます。そして今は、私が卒業しても、その思いはきつと変わらないと信じています。

幼稚園児が今も、紅梅の木の横を駆けています。私にとって大切な木。何人もの人の思いがほの見えるくる木。いつまでも、いつまでも木と一緒に遊んでね。いつまでも、いつまでも大切に

してね。いつまでも、いつまでも忘れないでね。私はそう願いながら、自分の卒業式を、そして自分たちの学校の創立五十周年を迎えたいと思っています。

(指導・吉原 郁夫)

◎この作文を読んで感じたこと

副題に「私の中学校創立五十周年記念誌」とある。これは、五十周年という節目を迎えた年に、三年間の在学を終えて、卒業しようとする作者の、記念の「自己史(誌)」でもある。一つの題材「校庭の紅梅」にこだわって、どこまでもどこまでも追求して止まない調査活動。調査に全力を投球してきた作者の生き方をあとづけて記述した。だから私は、小さな「自己史」といったのだ。

焦点がはっきりしている。それは二本の木であり、また、主役を担った一人の女性である。全体としては、木にまつわる一人物伝という形をとっているが、前半部と後半部に分かれ、その前に、序の部分がある。序の部分には梅の木の描写があつて、表現がよい。

前半部は、杉本鉞子との出会い、そして鉞子を追求しようとのめり込んで行っていたいきさつである。後半部では、和菓子屋さんを訪ねたこと、そして佐々木さんに教えられたことで、一步深くふみ込むことができた所以(ゆえん)を述べている。そして丸山さんなど、同窓の大先輩から得た情報で、探求心が満たされていく過程が語られる。

追求は終わってはいない。問題は残ったままである。作者はこれからも、この問題を追求し続けていくのではないか。

(倉澤 栄吉)